

明日の 東洋学

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)
Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo

ベトナムにおける黒タイの文字文化
櫻永真佐夫

ヒマラヤにおける伝承とその記録——
「口承テクスト」研究と現地の文字化をめぐる
中上淳貴・名和克郎



リンプーの「イエバ」というカテゴリーで呼ばれるシャーマン。「イエバ」のみが死霊に関するムンドゥムを語り、それに関する儀礼を行うことが出来る。タブレジュンにて。

(2009年、中上淳貴撮影)

ベトナムにおける黒タイの文字文化

櫻永真佐夫

西南中国を含む東南アジア大陸部北部は、多民族、多言語、多文字で知られる。この地域における、文書の生産、使用、保管は、地域を取り巻く環境や、そこに暮らす人々の日常とどのように関わってきたのだろうか。文字の系統論にとどまらず、文字文化が社会にどのように埋め込まれているのか、人類学者や歴史学者による関心が高まっている^(注1)。

この地域の言語分布と文字分布は、かならずしもぴったり重ならない。さらに、この地域が多文字なのは、それぞれの民族が、自分たちが話していることばを表記する独自の文字を発達させてきたのではないからだ。たとえばタイのミエン（中国におけるヤオ、ベトナムにおけるザオ）は、漢字漢文を用いて道教儀礼を執行してきた一方、ミエン語は表記しなかった。同様に、この地域の各民族が、どの文字を用いるか、あるいは用いないかは、儀礼慣行、外交、契約、娯楽をはじめとする、文化的、社会的コンテキストによってきたのである。

本稿でも、黒タイと称する人々の文字文化を、彼らの生活との関わりから理解する。以下では、まず、東南アジア大陸部北部における諸文字継承の状況を俯瞰しよう。次に、黒タイという民族の範疇を文字文化との関わりから示し、彼らの固有文字で記された文書の生産、使用、保管について述べたい。

1. 東南アジア大陸部北部のローカル文字継承

20世紀の国民国家化を経て、東南アジア大陸部北部は、中国、タイ、ラオス、ミャンマー、ベトナムといった、複数の国家に領土分割されている。その結果、西南中国では漢字、北・東北タイではタイ文字（シャム文字）、北部・中部ラオスではラオ文字、ミャンマーのシャン州ではビルマ



黒タイが居住する盆地風景
ベトナム、ライチャウ省タンウエン県。
2002年6月、撮影者：櫻永真佐夫

文字、西北・東北ベトナムではベトナム語（キン語）ローマ字表記のクオック・ゲーが普及している。

これら各国の国家語を表記する文字（ここでは「国家文字」とよぶ）は、近代教育を通じて普及したものである。一方で、国家文字とは異なる文字伝統が、19世紀以前の地方村落にも存在していた。英仏を中心とする19世紀の探検家たちが残した資料を見るだけでも、貝葉や紙を書写材料とし、さまざまな伝統文字によって記された宗教文書、行政文書、年代記、書簡など、さまざまな内容をもつ文書類が数多く確認できる。

こうした国家文字ではない伝統文字を、本稿ではローカル文字と呼ぶ。各国の政治的、経済的、地理的周辺部が接しあうこの地域に、ローカル文字は数多く重なり合って存在してきた。20世紀以降は国家文字の優位が確立していくなかで、これらローカル文字継承者の数は減少傾向にある。しかし、このまま先細って、これらは近い将来消滅してしまうのだろうか。いや、どうやら意外にしぶとそうである。いくつかのローカル文字が、地域や民族アイデンティティと結びついて、積極的に継承されようとしているからだ。

たとえば、タム文字は、13、14世紀に伝播したパーリ語仏典を記すために用いられてきたモン系統の文字である。この文字は、東北タイ、北タイ、西北ラオス、シャン州、西南中国の一部までの連続する広い地域に、パーリ語仏典の写本とともに分布している。写本は、貝葉と呼ばれるタラバヤシの葉を書写媒体に、鉄筆で刻んで記されている。



デーヤイ村の寺院には100巻程度の貝葉が残されているが、2001年当時この文字を読むことが出来るのは70代の僧侶1人だけ（9名の僧侶が在住）。1999年に96歳で他界した僧侶はタム文字だけでなく、タイノイ文字、コム文字にも堪能であった。写真は古い貝葉を写しているところ。若い僧侶たちはこの文字に関心を持たないので、読み書きを教授することはまったくない。
タイ、コーンケーン県ムアン郡デーヤイ地区デーヤイ村
2001年9月、撮影者：津村文彦



葬式での『クアム・トー・ムオン』の読誦
ベトナム、ディエンビエン省トゥアンザオ県
1997年11月、撮影者:櫻永真佐夫



日相をみるための占ト書『バップ・ム』。
ベトナム、イエンバイ省ヴァンチャン県ギアロ
2004年2月、撮影者:櫻永真佐夫

しかし、東北タイでも国家文字の普及とともに、タム文字を読み書きできる人は減ってきた。そうした中、近年、貝葉写本に代わって、貝葉の印刷本が出版されるようになり、ローカルな知識人や職業研究者がタム文字への関心を高めている。

黒タイ文字の場合も、ベトナムの市場経済化政策が軌道に乗り始めた1990年以降、ローカルな知識人と職業研究者が中心となって、民族の伝統として積極的に継承されようとしている。それを受けて、ソンラー省、ディエンビエン省の一部では、2000年前後から、小学校の補講授業に黒タイ文字教育を試験的に組み込んだ。

黒タイ文字は、どのように継承されてきたのだろうか。その問題に迫る前に、黒タイという集団性について、文書との関わりから述べたい。

2. 黒タイの集団性と年代記『クアム・トー・ムオン』

今日のベトナム社会主義共和国では、言語的特徴、生活・文化的特徴、民族的自意識という3つの指標に基づいて、54の民族が公定されている。諸民族の平等を標榜する共産党による、民族政策実施のためである。

総人口約7600万人の86%を占めるのがキン族である。彼らが、紅河デルタを中心に、千年以上にわたって、歴代ベトナム諸王朝を興亡させてきた。残り53の少数民族中2番目に人口が多い民族が、133万人を擁するターイ (Thái) である。黒タイは、白タイとともに、このターイの地方集団とされている。西北地方で灌漑水稻耕作を主生業とする

盆地民であり、国境を接するラオス側、中国側にも数万人単位で居住している。

ラオスでは、白タイ、黒タイは別の民族として分類されている。一方、ベトナムでは、この二つはターイという一つの民族の地方集団と見なされている。それは、ともにタイ語系の近似する言語を話すこと、上座仏教を受容していないにもかかわらず、上座仏教とともに東南アジア大陸部東部に広まった古クメール系の文字を継承していること、姓、財産が父系的に継承されることなどによる。

自分が白タイか黒タイかは、彼ら自身もふつうははっきり意識している。それは、居住地域が盆地ごとにかなりははっきり分かれているからである。さらに、彼らは次のような点に、両者の文化的相違を見いだしている。既婚女性の髪型、女性の上着の襟元の形、家屋内の配置、祖先を祭る忌日、表記文字の字体などの違いである。

伝承に注目しても、両者には、興味深い差異がある。ターイ社会は、20世紀に至るまで、首領を頂点とし、貴族、平民、半隷属民、奴隷という諸階層からなっていたが、首領や貴族を世襲したのは、黒タイの場合、ロ・カム系統の姓をもつ一族であった。彼らは、ギアロという大盆地に生まれ、各地を平らげながら最終的にディエンビエンにたどり着いた英雄祖先ラン・チュオンの子孫とされる。一方で、白タイの旧首領一族デオ氏などは、自分たちがラン・チュオンの子孫だとは考えていない。さらには、黒タイの居住地域がラン・チュオン征戦経路上にあったとされる諸盆地に、ほぼ一致しているのである。

ラン・チュオン征戦伝承は、年代記『クアム・トー・ムオン』に詳しいが、この年代記は黒タイの間でのみ継承されてきた。『クアム・トー・ムオン』は、首領の始祖の天上からの降臨、ラン・チュオンによる領土拡大、各首領の事績と系譜を記している。各地の黒タイ村落では、葬式の際にこれを読誦する習慣が、共産主義者による風俗改変が北ベトナム各地で進む1960年頃まで、持続されてきた。こうした習



西北区教育局出版から1966年に出版されたタイ語講読の教科書のコピー。タイ文字は印刷字体風だが、実は手書き。白黒ガリ版刷り。ハノイにて6000冊印刷されていることが、左頁（表表紙の裏面）に記されている。
ベトナム、ハノイ国家図書館所蔵
2006年3月、撮影者：櫻永真佐夫

慣は、黒タイの領土と歴史に関する社会的な記憶を、繰り返し人々に刻み込む役割を果たした。その意味で、この年代記は、黒タイという集団のメンバーシップと分布域を規定する政治的作品でもあった。

さらに、黒タイの人は亡くなったあと、ラン・チュオンの故地ギアロから天上に靈魂が登るという信仰を広く共有している。つまり、現世の人が住む地上と、精霊が住む天上世界を結びつけ、魂を往還させる回路も、ラン・チュオンの伝承と密接に関わっているのである。

3. 村落における文書継承

タイが継承してきた文字群は、ベトナムではタイ文字と総称されている。なかでも、黒タイが用いてきた統一性の高い字体は、黒タイ文字と呼ばれている。では、黒タイ文字による文書に、どのようなものがあり、また、それを人々がどのように、継承してきたのだろうか。

たとえば、筆者が1997年から調査してきたディエンビエン省トゥアンザオ県のA村を例に挙げよう。A村では、水田、焼き畑、菜園の経営と、家畜飼養によって、食料の多くを自給している。人口約360人、戸数約50で、人口規模、経済レベルともに、県では平均的な黒タイ村落であり、住民は皆、かつての平民出自である。

現在までA村に伝わっている黒タイ文字の文書のうち、ジンチョウゲ科の植物を材料とする漉き紙に、毛筆と墨で手写された古文書が4冊ある。うち3冊が歌謡で、残り1冊が『クアム・ファイン・ムオン』という年代記の一種である。

1997年に72歳の男性語ったところでは、かつてはもっと古文書があった。村の由緒書きもあった。しかし、インドシナ戦争（1946-1954）、ベトナム戦争（1960-1975）などの戦乱に加え、封建遺習撤廃や迷信異端排斥を目指す、党指導による風俗改変もあった。のみならず火災もあり、1980年頃、今の数に減った。

一般的に黒タイ村落でもっともよく目にするのは、歌謡

である。次いで暦書を含む占卜書である。しかし、A村の場合、暦書『パップ・ム』は、1970年代に学習ノートにボールペンで記されたものが一冊あるだけだ。しかも、他村で見られる伝統的な形態の文書よりも、明らかに薄い。抜粋だからだ。迷信異端の書を保持していると批判されるのを恐れた保持者が、原本を廃棄したせいである。

現在でも、婚姻、家の新築祝い、出立、田植えや収穫、その他各種儀礼を行う際には、『パップ・ム』を保持している祈祷師を訪ねて、日取りを選んでもらう。評判のいい祈祷師を、他村まで訪ねることもある。『パップ・ム』は、文字のみならず、記号と図像表現に満ちている。『パップ・ム』を読むとは、文字、記号、図表を総合的に解釈することである。解釈の技量もまた、祈祷師としての評判には含まれているからだ。

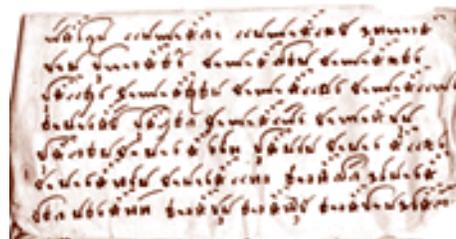
4. 村人の識字

どれくらいの人が、黒タイ文字を読めるのだろうか。1997年の調査では、A村で、女性2人を含む12人の50歳以上の男女が読み書きできた。一方、6歳以上の就学年齢の子どもと青年、当時40歳代前半までの女性、60歳代前半までの男性のほとんどが、クオックグーも読み書きできる。つまり、村で60%を越えるクオックグー識字率に比べて、黒タイ文字の識字率は、3%と低い。

黒タイ文字の低い識字率について、村人はしばしば「教える学校がないからだ」と述べる。たしかに、黒タイ文字を読み書きできる人たちは、黒タイ文字教育が実施されていた時代に就学していた人たちである。しかし、実際にそのようなのだろうか。一世紀近く歴史をさかのぼって話そう。

フランス植民地支配下にあった20世紀前半、公教育では、仏文とクオックグーが教えられていた。しかし、1954年にインドシナ戦争が終結し、フランスが撤退すると、ベトナム民主共和国（当時の北ベトナム）下で、仏文教育は廃止され、クオックグー教育が推進された。

一方、西北地方には1955年に民族自治区（1955-1975）



「啓定二年二月閏拾八日、セン・バーン・バイン・クアイの書を記す」と黒タイ語でタイトルが書かれた家霊簿の最初のページ。8葉16頁のうち10頁に毛筆で記述。筆写者不明だが、1919年（啓定2年）の儀礼執行のための文書なので、その頃の手写本と思われる。
ベトナム、カム・チョン氏所蔵の原本を2001年に撮影。

が設置され、特殊な展開があった。自治区内では、各公的機関での自民族の言語と文字の使用が認められ、民族語による教育も目指されたからである。こうして、固有文字を持たない民族語に関しては文字の創造が、タイのように固有文字を持つ場合は、字体の統一や改訂が試みられた。タイ文字は、黒タイ文字の字体に基づいて制定された。そしてタイ文字教育は、自治区内各地で、クオックグー教育に一元化される1969年まで、実施された。

しかし、黒タイ文字を読み書きできるA村の12人のうち10人が、学校で黒タイ文字を習ったのではない。彼らが通った小学校では、黒タイ文字を教えていなかったからである。彼らが読み書きを覚えたのは、すでに耳で親しんでいる歌謡の歌詞を覚え、歌うためであった。電気もラジオもない時代、村人たち共通の最大の娯楽は、歌や踊りであった。1960年代までは、娯楽のために文字を習得しようという人が村にもいたわけであり、必ずしも学校教育の成果ではなかったのである。その後さまざまな情報機器の普及とともに、伝統的な歌や踊りに関心を示す若い世代は、どんどん減っている。

5. 黒タイ文書の生産と使用

A村で目にすることが出来る文書は、歌謡と暦書くらいである。ソンラー省の文書館に、1500をこえる黒タイの古文書が収集され、保管されているが、そのほとんどが、歌謡、暦書、物語である。残りは、若干の年代記、祈禱書である。文書館にない他のジャンルの古文書には、系譜文書(家霊簿)、慣習法などがある。

既述のとおり、葬式の執行と年代記『クアム・トー・ムオン』の関わりは明白である。他に、『タイ・プー・サク』という希少年代記がある。これは、1930年代まで、首領一族を祭る「くにの祭礼」を執行する際に読まれ、歌われた。また、上記『クアム・ファイン・ムオン』も、役職者たちの公的な宴席で歌うための年代記であった。

筆者が「家霊簿」と名付けている系譜文書も、首領一族を中心に継承されてきたものである。19世紀以前のものは実見していなし、非常にまれである。系譜文書と言っても、ほとんど故人の姓名の列挙にすぎない。系譜関係、婚姻、兄弟姉妹関係、生前の役職など、故人の個人情報も記述されていない。その意味で、東アジアに広く分布する家譜や族譜と異なるし、非常に不完全である。

とはいえ、家霊簿も、年に一度の父系祖先祭祀の際に、祖先を招くのに用いられる。祖先祭祀、系譜文書、姓は、東アジアの父系親族結合における3つの重要な道具立てである。つまり、曲がりなりにも黒タイ社会は、この3点セットを兼備しているのである。ベトナムや中国の王朝との間

に、20世紀に至るまで直接的な政治的支配-被支配関係や経済関係を築いてきた黒タイの首領一族は、宗族的な父系集団の編成を試みたためだろう。

慣習法は、筆者が知るところ、2冊しか現存していない。首領の系譜、支配領域、行政機構、各種刑罰、各種共同体儀礼などを記している。これが編纂されたのは、植民地下で西北地方の行政制度、インフラストラクチャーの整備が進む1920年前後であり、フランス植民地政府の指示に基づくようだ。つまり、これは黒タイ社会内部で用られ、流通した文書ではない。外部向けに書かれている点で、他の文書とは異質である。だから慣習法を例外とすれば、黒タイ文書は、娯楽のためのものと、儀礼執行と関わりを持つものに、ほぼ分類できそうである。

しかも、年代記、祈禱文書、系譜文書などの文書群は、共同体レベルの祭祀を執行する役職者としての司祭者集団が中心となって、生産、保管してきたことが明らかになっている。これに対して、暦書、歌謡、物語などを生産してきたのは、役職者とは限らない。とはいえ、歌謡などの文書も、筆者のこれまでの調査では、祈祷師や、1950年以前の村長の家族など、村でも宗教的、政治的に威信のある人々の周辺に集中していた。

要約するに、黒タイ文書は、ある特定の職業集団の人々が、特定の目的のために、生産、使用、継承してきたという性格が強かった。ベトナム語、クオックグーが普及する以前、黒タイ文字が彼らの間であまねく用いられていた訳ではなかったのである。

6. 文字継承の現在

以上、黒タイの文字文化の概要を述べてきた。現在の村で、その文字を読み書きできる人は少ない。しかも、実はベトナムの国家文字が普及する以前も、そうであった。共同体儀礼を担当する人や祈祷師を中心に、読み書き、文書は継承されてきたのである。この二つの時代で異なるのは、識字者の世代構成であろう。現在、読み書きできる人は、60歳代以上に明白に偏っている。

実際には、社会の中のある特定の人々が、特定の目的のために、文書を生産、使用、継承してきたという点は、他の多くのローカル文字にも共通している。というよりも、社会の全成員が、通信、記憶、計算、契約、商業、政治、法、娯楽、試験その他、あらゆる目的のために、日常的に用いることが目標とされる、国家文字のあり方の方が、むしろ近代以降に展開した特殊な現象といえるかもしれない。

1990年頃から、村の高齢者で黒タイ文字の読み書きを知る人が、年代記、歌謡、家霊簿などを書き残す動きもあらわれている。衣装とともに、彼らの文字もまた、タイ文

化を代表する視覚イメージであることが、マスメディア等を通じて普及してきたからだ。先述の通り、この流れを受けて、タイ文字に関する非常に初歩的な読み書きを、一部の小学校では教えている。しかし、若い世代の固有文字への関心は低い。生活のために、若い人がどんどん村を離れて出稼ぎに行かなくてはならない現在、彼らが求めているのは、高収入を得るための知識や学歴である。しかも、それにはベトナム語、クオックグーからアクセスするほかない。

(国立民族学博物館准教授)

(注1) Veidlinger, Daniel M. 2006 Spreading the Dhamma; Writing, Orality and Textual Transmission in Buddhist Northern Thailand. Honolulu: University of Hawaii Press. 飯島明子 2009 「貝葉写本のテキスト学—『タム文字写本文化圏』を中心とする若干の考察」齋藤晃編『テキストと人文学: 知の土台を解剖する』人文書院、209-228 ページ。Kashinaga Masao (ed.) 2009 Written Cultures in Mainland Southeast Asia, Osaka: National Museum of Ethnology.

ヒマラヤにおける伝承とその記録—— 「口承テキスト」研究と現地の文字化をめぐる

中上 淳貴 (東京大学大学院総合文化研究科博士課程)
名和 克郎 (東京大学東洋文化研究所准教授)

ヒマラヤ南面の山中で、バラモンにもチベット仏教僧にも頼らない宗教・儀礼伝統を持つ人々の間で民族誌的調査を行う者にとって、南北の山の彼方の偉大な諸「大伝統」を研究する「東洋学」は、その成果に学ぶべき場面は多々存在するとしても、基本的には自分達が属するものとは異なる学問伝統だと映るかも知れない。だが、そうした学分的分業は必ずしも自明ではない。実際、120年近くにわたり南アジアの古典諸文献の校訂・翻訳等を営々と刊行してきたハーバード・オリエンタル・シリーズの一冊として、1998年に西ネパールの鍛冶屋カーストに属する「シャーマン」達の「口承テキスト」(ネパール語ジャジャルコット方言、デーヴァナーガリー文字)とその英語訳・注解が刊行され、さらに2009年ネパールの諸民族の「シャーマン」の「口承テキスト」の校訂・翻訳が二冊、うち一冊はDVD付きで刊行されたのである。とりわけ後者は、「テキスト」のみならず儀礼の場に関する写真や音声・動画をも収録している点で、東洋学的な情報蓄積の最新の展開を示すものとも言い得よう。ここにおいて、ネパール・ヒマラヤのシャーマニクな伝統に属する一群の「口承テキスト」は、東洋の知的遺産の一つとして、リグ・ヴェーダ以来の南アジアの文献群の一角を占めることとなったのである。

ヒマラヤの口承伝承を古典語による文献群と併置するこうした評価は、無論一朝一夕に成立した訳ではない。カトマンズの英国レジデントであったブライアン・ホジソンが残した19世紀半ばの先駆的な業績を別にしても、ネパール・ヒマラヤの神話や口承伝統は、過去40年以上にわたり、イギリス、アメリカ、ドイツ、フランス、日本等からやっ

て来た多くの研究者の関心を集めてきた。とりわけドイツの研究者達は、1980年代以降、口承で伝えられる強い定型性を持つ伝承を「口承テキスト」と捉え、その記録・転写・注解・分析を行う作業を進めてきた。伝承の口承性に注意を払いつつも、従来東洋学者が文字テキストに対して行ってきたのと同様の文献学的手法により「口承テキスト」を解析していくという一種微妙な作業は、しかし記述分析の圧倒的な緻密さにより注目され、空間認知を巡る認知科学的な研究と交差するなど多様な展開を遂げている。また、こうした研究動向の背景には、ドイツがネパールに独自の研究所を長期にわたって維持し、民族学者・人類学者と共に優れたインド学者が継続的に調査研究に携わってきたという経緯がある。現在ハーバード・オリエンタル・シリーズの編集主幹を務める M. ヴイツェルはその一人である。勿論ドイツ以外の研究者もこの領域で成果を挙げており、例えばケンブリッジ大学の考古学人類学博物館を拠点として開始された「世界口承文献プロジェクト」を切り回しているマーク・トゥリンは、ネパール・ヒマラヤをフィールドとする気鋭の言語人類学者である。

だが、こうした研究の進展の中で屢々見落とされてきたことがある。こうした「口承テキスト」は、必ずしも外部からやって来た研究者によってのみ書き取られ記録されてきた訳ではないという点だ。実際、ネパール国内だけを見ても、従来から存在していた「ネパール民話集」の類に加えて、ここ20年程の間に、様々な民族の伝承類を現地語で書き記し、或いは主にネパール語に翻訳し解説した書物が、多数刊行されているのである。1990年の「民主化」に至る

運動や1993年の国際先住民年に伴う民族意識の高まりを契機として増加したこうした出版物は、地方で自費出版された小冊子から、著名な知識人による王立ネパール・アカデミー(当時)刊行の大部の著作に至るまで、その形態も内容も多様である。加えて、従来口承で伝えられてきた伝承が現地の人々自身によって何らかの形で書かれるという現象は、民族運動が高まる以前から断片的に報告されてきた。確かなことは、口承でのみ伝えられてきた消滅に瀕した伝承を、外部の研究者が記録し保存することで掬い上げるといふ、植民地時代の人類学者が想定したような単純な図式に収まらない形で、事態が進行している事である。以下ではこの点を、ネパールの西端と東端の二つの事例から見てみよう。

極西部ネパールからインド国境地帯のヒマラヤ高地に住み、ランという母語による民族名を共有する人々の間に伝わる代表的な「口承テキスト」は、伝統的な死者儀礼で丸一日近くかけて詠唱されてきたセーヤーモである。死の起源や近親相姦の禁止等を主題とする幾つかの伝説と、死者の魂が辿る祖先の地へと至る路での行為を内容とするこの伝承はしかし、1993年名和が初めてこの地を訪れた当時、多くの村で儀礼簡素化の動きに伴って既に途絶していた。はじめてこの伝承を実際の儀礼の場で聴いたのは、帰国寸前の1995年3月、ネパール領の中間山地に一つだけ飛び地のよう存在するランの村シャンカンにおいてである。この時セーヤーモを中心になって朗誦したジャイドゥワ・シン・ブダトキは、記憶のみに基づきセーヤーモを十全に行うことが出来るネパール領出身の最後の人物とも評され、実際この長大な伝承を、葬儀の日の午後から翌日の昼前まで一切文字に頼ることなく断続的に朗誦し続けた。共に朗誦した彼の弟子は、デーヴァナーガリー文字で書かれたノートを見ながらそれを行ったのであるが、他方、葬儀の場で年長の男性達がこの師弟の朗誦に時に加わる様は、セーヤーモが本来葬送儀礼の場における朗誦を通して記憶されていたという、ジャイドゥワ氏が示唆した伝承過程を裏書きするものに思われた。

極西部ネパールを再訪した2001年には、ジャイドゥワ氏と弟子は共に既に亡くなっており、ある葬儀に朗誦の為に招かれたジャイドゥワ氏と同村の男性は、自分も含め最早誰もジャイドゥワ氏のように十全にはセーヤーモを行えないが、それでも誰かが行わなければならない旨を前もって参列した人々に語っていた。実際の朗誦過程自体が問題含みであったこと相俟って、セーヤーモの伝承が、徐々に人々の記憶の彼方へと消え去りつつあるのではないかという感を抱いたものである。

だが事態は、2008年の再訪時には新たな展開を見せてい



セーヤーモの場。死者の服を着た人形の、向かって左側に座っているのがジャイドゥワ・シン・ブダトキ氏。右奥に座る弟子プレム・シン氏の膝の上には手書きのノートが見える。シャンカンにて。
(1995年、名和克郎撮影)

た。長年刊行が予告されていたセーヤーモのデーヴァナーガリー文字転写とヒンディー語訳が、ついに2003年に刊行されたのである。著者ジャガト・シン・ナビヤールはインド領出身のランで、長年ネパールで高校教師をしつつ長老達に学んだ膨大な知識を整理し、併せて自らもセーヤーモの朗誦を行った人物である。遺作となった200頁を越えるこの書物は、ランの民族団体によりインド領ネパール領双方の全てのランの村に配布され、併せて本書刊行を一契機として、セーヤーモの為のトレーニングが不定期に催されるようになったという。かくして、伝承が途絶して久しかった村々にも、セーヤーモの知識は再び広がっていくことになったのである。

だが、事態は伝統の復活として単純に捉えられるものではない。例えば、筆者が参列したある葬儀では、セーヤーモ自体ではなくそのヒンディー語訳が読み上げられていた。加えて、ジャガト氏の著書に書かれたセーヤーモは、各地の長老の知識を凝縮し最も正統的なテキストを再構成しようとした長年の努力の結晶であり、そのため例えばジャイドゥワ氏の語っていたものよりもはるかに口語との距離が大きく難解でもある。それはジャイドゥワ氏が主導したセーヤーモが参列者と共に朗誦されたのとは異なり、現在までセーヤーモを部分的にであれ口承で伝承してきた人々の記憶と、上手く整合するとは限らない。実際ジャイドゥワ氏自身、ナビのセーヤーモはよく判らないと語っていたのである。かくして文字を媒介とした一つのヴァージョンの広汎な流通は、儀礼の場におけるセーヤーモのあり方自体にまで影響を及ぼしつつあるのである。

ランのセーヤーモを巡る状況が、現地の文字化・出版とその影響という枠組で概ね捉えられるのに対し、中上が調査を行ってきた、東ネパールからシッキムにかけての中間山地に住むリンブーが継承する「口承テキスト」ムンドゥムを巡る状況は、様々な主体による複数の文字化が併存してきた点でより複雑な状況を呈する。



ある葬儀の様子。左奥の男性が出版されたセーヤーモのヒンディー語版を読み上げている。ダルチュラにて。(2008年、名和克郎撮影)

東ネパールからインドの隣接地域の中間山地を主たる故地とし、リンブーやライを代表とするキランティ諸族は、先祖伝来の伝統的知識の総体、もしくは文化的価値の中核をなす伝承群を「ムンドゥム」或いはそれに類似の名称で呼んできた。中でもリンブーは、18世紀初頭に発明されたとされる固有のリンブー(シュリジュンガ)文字が一部の知識人に継承されてきたことでも知られるが、実際にはムンドゥムの継承は主として口承によって担われてきた。しかしながら、20世紀後半には近代教育の導入や村からの人口流出もあって伝承者の数は減少傾向にあった。他方、新聞や雑誌などメディアの発達とともに、リンブーの口承伝承の一部が断片的に民話や伝説といった形で取り上げられる場面も生じた。

ムンドゥムに関するリンブー自身による組織的なテキスト化の試みは、1960年代に遡る。その背景には、ネパール・インド国境沿いに住むリンブーは、チベット・ビルマ語族の言語を母語とするネパールの諸民族の中でもとりわけ英領インド時代の恩恵を享受した知識人を多く輩出してきたという事情がある。インドで教育を受けリンブーの文芸復興運動を試みたキリスト教徒の知識人イマン・シン・チェンジョンは、その中でも傑出した一人であった。彼はキランティの歴史や文化について数多くの著書を残しており、彼によって1963年に王立ネパール・アカデミーよりネパール語で出版された『キラート民話集』は、ライとリンブーの民話を組織的に採録した最初の出版物である。一方、ムンドゥムの中でもより神話的色彩の強いもののテキスト化は、当時のキランティの知識人にとって、南アジア世



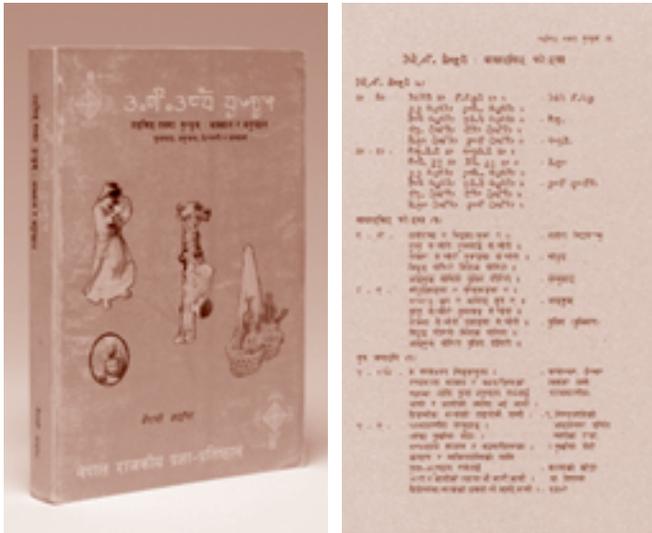
リンブーの村落風景。リンブーの村は、ヒマラヤ南麓の標高800メートルから1800メートル程の中間山地に点在している。リンブーの主な生業は、稲やトウモロコシなどの農業で、多くは牛やヤギなどの家畜を飼育する。シッキムにて。(2001年、中上淳貴撮影)

界の中で独自のアイデンティティを示すためにも不可欠な作業であった。そのためチェンジョンは、幾つかのムンドゥムを採録した書物を「キラートのヴェーダ」と表現し、ヒンドゥーのヴェーダ文献群に比肩する価値をもつものとして位置付けようとした。

その後1990年代に入ると口承伝承のテキスト化の動きは加速し、主体、体裁、内容共に多様な展開を見せる。まず、リンブー出身ではないがリンブーの歴史を専門とするネパール人歴史学者シヴ・クマール・シュレスタは、教職を退いてから数年かけて東ネパールの各地をめぐり民話を採集し、『キラート民話集』(全39話。1992年)と『キラート民話集成』(全35話。1994年)を出版している(日本ネパール協会の会報に幾つかの邦訳と解説がある)。

現代ネパールを代表する詩人の一人であるリンブーのバイラギ・カインラは、1992年から2003年までに5冊のムンドゥムの本を出版している。これらの本の際立った特徴は、「テキスト」のリンブー文字への翻字、デーヴァナーガリー文字による発音表記、さらにネパール語訳及び注解を、3段組で各ページに配するという、口承伝承のテキスト化における良質なモデルとでもいえるべき体裁を提示したことにある。内容的には、創世神話から起源神話、移住や婚姻規制など、多岐にわたる伝承の細部を再現しようと試みている。また、ホジソンが収集し大英図書館に所蔵されているムンドゥムの書承テキストの整理に関わったことをきっかけとして、近年では、通時的な展開をも踏まえてムンドゥムに見られる世界観をより深化された形で提示し英文で紹介する作業に着手している。

一方、宗教的職能者自身によるテキスト化の試みも増加傾向にある。タプレジュン出身のリンブー司祭であるラナ



B. カインラ氏が編纂した『トンシン・トクマ・ムンドゥム』。リンブーの重要な再生儀礼で詠唱される伝承テキスト群を収録している。

ドージ・シュレンは、自らムンドゥムの保存のための組織であるリンブー・シャーマン協会を設立し、1990年から1993年の間にリンブー文字で書かれた3冊のムンドゥムの著書を出版している。この背景には、ヒンドゥー司祭の影響のもと近年拡大しつつあるサッテハンマ派の宗教的職能者らが、ムンドゥムの「伝統」を歪曲しているという危機意識をもつ一部の職能者の存在があげられる。この他にも、先住民運動の流れで設立されたキラート・リンブー協会（リンブー語でキラート・ヤクトゥン・チュムルン）やキラート・ライ協会（ライ語でキラート・ライ・ヤヨッカ）などからも口承伝承に関する幾つかの著作が刊行されている。またインドのシッキムやダージリン地域でも同様の出版活動が存在し、さらには口承伝承の多様性と正統的な「伝統」的テキストを巡る検討を行う集会がネパール、インド両国からの参加者を得て毎年行われている。

以上のように、ムンドゥムの文字テキスト化の主体は、教育者、文学者（詩人）、先住民運動協会、シャーマン自身など様々であり、その内容も質も一様ではない。それぞれのテキストには、執筆者、編纂者らの嗜好、宗教的信念などが垣間見える。詳細な分析は別項に譲らざるを得ないが、口承伝承のあり方そのものもテキスト化に呼応してその性質を変化させつつあり、またテキスト化の多様な展開は、先住民運動や自文化理解に関する議論を活性化している。しかし、ネパールの人類学的研究におけるローカルな政治過程への関心の集中にも拘わらず、こうしたテキスト化を巡る状況は、残念ながら国外の研究者から十分な注目を浴びてこなかったのである。

以上から明らかなように、外部の研究者が現地に出かけ、口承で伝えられてきた「テキスト」を記録し保存するとい



サッテハンマ派の司祭。リンブー文字で書かれた經典を片手に儀礼を執り行っている。カトマンドゥにて。（2004年、中上淳貴撮影）

う図式は、実際の状況に対してますます部分的なものになりつつある。文字化や出版は多くの場合既に進行中であり、「外部」（これ自体相対的な概念だが）からやってくるのも「口承テキスト」研究者だけではない。こうした状況において、人類の知的遺産たる危機に瀕した口承文献を消滅前に記録し保存しようというような一見善意の呼びかけは、伝承を保持している人々と、保持している筈であった（と考える）人々の、多様な意志と口承伝承の文字化を含む実践とを、予め捨象したところにしか成立し得ない。加えてこうした図式においては、研究者自身のものも含む多様な文字化されたテキストがもたらす影響が、議論の中核から排除されてしまいがちだ。そもそも「口承テキスト」という枠組自体、例えば「民話」同様外挿された枠組であって、生産的なものではあるが絶対的なものではない。厳密に言えば、出発点で参照されるべきは「ムンドゥム」や「セーヤーモ」という現地の概念化である筈である。それを現地の人々が南アジアやチベットの文献群に比定することが、必ずしも新しい現象ではないとしても。

ヒマラヤ地域の定型的な口承伝承という未開拓の広大な研究領域に注目し、詳細な記述分析の可能性を提示したのは、「口承テキスト」研究の大きな功績であった。それでは、その成果を踏まえて今後どこに進むべきなのだろうか。困難の一つは、文献学的な形での「口承テキスト」の確定自体にある。近年まで口承でのみ状況に応じ常に変化しつつ伝えられてきた伝承を「テキスト」として文字化する作業は、何を持って正統的とするかの根拠自体が常に問われるが故に古典的な東洋学の校訂作業を越える検討を要請し、またテキスト化されたヴァージョンが未来のパフォーマンスを拘束する可能性故に、少なくとも潜在的に介入的な作業となる。誰もが状況に巻き込まれているが故に全体を外部から俯瞰的に論じ得る特権的な場は存在しない。加えて、「口承テキスト」としてテキスト化されるものはリアリティの一部に過ぎない。勿論、文字化により、記録さ

れた個々の伝承が実際語られた場に存在していた一回性や文脈性、表出性や身体性が捨象されてしまうという問題は、「口承テキスト」の研究者に当初から認識されていたし、音声や映像の記録や民族誌的記述との接合など、それを部分的に乗り越えようとする試みも行われている。しかし「ムンドゥム」のような現地概念と「口承テキスト」という分析枠組の齟齬は、最終的には分析枠組自体の更新を要請することになるだろう。ヒマラヤの世界観の再構成に向かうにしても、現代ネパールにおけるヒマラヤ先住諸民族の政治的主張の展開を追うにしても、多様なテキスト化の試みとその評価とを視野に入れつつ、それぞれの伝承が語られ書き取られ読まれる実践の場に立ち戻り、捉えきれない再帰的な全体性と向き合うことから出発しなければならない。

センター便り

平成21年度漢籍整理長期研修

昭和55年度、センターの前身である東洋学文献センターから実施してきた漢籍整理長期研修は、今年で30回目となった。前期平成21年6月15日から19日まで、後期は平成21年8月31日から9月4日までの計2週間。参加者は、大学図書館等の職員10名と院生6名であった。受講後それぞれの所属機関で、研修の成果を活用している。講師として、東洋文化研究所のスタッフに加えて、所外8名の専門家に協力いただいた。この場をかりて厚くお礼申し上げます。今後も実施していく計画である。

東洋学研究情報センター運営委員会委員 (2009年度)

所外委員

古田 元夫	附属図書館長 (大学院総合文化研究科・教授)
平野 聡	大学院法学政治学研究科・法学部准教授
小松 久男	大学院人文社会系研究科・文学部教授
谷口 信和	大学院農学生命科学研究科・農学部教授
澤田 康幸	大学院経済学研究科・経済学部准教授
村田雄二郎	大学院総合文化研究科・教養学部教授
姜 尚中	大学院情報学環・学際情報学府教授
田嶋 俊雄	社会科学研究所教授
吉田 早苗	史料編纂所教授

所内委員

羽田 正	教授	西アジア研究部門、所長
丘山 新	教授	(兼)東アジア研究部門(第二)センター比較文献資料学
榊屋 友子	教授	西アジア研究部門(兼)センター造形資料学
板倉 聖哲	准教授	東アジア研究部門(第二)(兼)センター造形資料学
名和 克郎	准教授	汎アジア研究部門(兼)センター比較文献資料学
廣田 輝直	准教授	センター比較文献資料学
園田 茂人	教授	センターアジア社会・情報
松田 康博	准教授	汎アジア研究部門(兼)センターアジア社会・情報

センター長

羽田 正	教授	西アジア研究部門
------	----	----------

センタースタッフ

羽田 正	(はねだ まさし) センター長	西アジア研究部門教授 比較歴史学
丘山 新	(おかやま はじめ) 副センター長	センター比較文献資料学分野教授 仏教思想
榊屋 友子	(ますや ともし) センター造形資料学分野教授	イスラーム美術史
板倉 聖哲	(いたくら まさあき) センター造形資料学分野准教授	東アジア絵画史
名和 克郎	(なわ かつお) センター比較文献資料学分野准教授	文化人類学
廣田 輝直	(ひろた てるなお) センター比較文献資料学分野准教授	東洋文化研究情報DB
園田 茂人	(そのだ しげと) センターアジア社会・情報分野教授	比較社会学
松田 康博	(まつだ やすひろ) センターアジア社会・情報分野准教授	アジア政治外交史
SMITH ROGER DALE	(すみすろじャーでー) センターアジア社会・情報分野准教授	海洋法・国際関係
松田 訓典	(まつだ くにのり) センターアジア社会・情報分野助教	インド大乘仏教思想

明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学
研究情報センター方第22号

発行日 2010年1月29日
編集・発行 東京大学東洋文化研究所
附属東洋学研究情報センター
〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番地1号
電話 03-5841-5839(直通)
FAX 03-5841-5898
E-mail ricas@ioc.u-tokyo.ac.jp
URL <http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp>

デザイン コスギ・ヤエ／印刷 榊三秀舎